

風塵地帯



コンパクト・ブックス



風塵地帯

一九七一年二月二十日 初版印刷
一九七一年二月二十五日 初版発行

定価三四〇円

著者 三好 徹

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二の五の十

郵便番号 一〇〇一

電話 東京 (265) 六一一一

振替 東京 一五六五三

印刷所 大日本印刷株式会社

著者との了解により検
印を廃止いたします。

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1971

風塵地帯



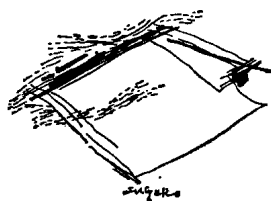
コンパクト・ブックス



I313. 45
J3035

風塵地帶

三 好 徹



コンパクト・ブックス

集英社

目次

第一章	南方特派員	九
第二章	仮面と暗殺	八一
第三章	火災樹の痕	一三三
第四章	風塵地帯	一九三

風
塵
地
帶

第一章 南方特派員

1

カメラマンの鳩谷実到最后に会ったときは、いまでも、よく覚えてゐる。それは九月二十六日の夜のこと、それ以後、かれがわれわれ在留特派員の前から永久に姿を消してしまつたから、という理由ばかりではなく、その夜、あの女に思いがけなくも会うことができたからであつた。

私は、いま、思いがけなくも、という表現を使つたが、あるいは、これは正確ではなかつたかもしれない。羽田空港を、同僚や編集局長に見送られて出発するときから、私の内がわには、霞のように淡い期待がたちこめていたことを、だれよりも、私自身がよく識つていたし、そして、私をのせた飛行機が最後の寄航地シンガポールを飛立つてさらに南下する刻々、私の内部の期待もまた積乱雲のようになくともふくれ上がつて行つたのだ。

南洋の紺碧の海に散在する大小さまざまな島を眺めながら、そのときの私は、ともすれば昂ぶろうとする自分の気持を抑えるのに、かなり苦勞してゐた。これは久しぶりに特派員として外地を踏むための興奮なのだ、と自分自身に対して弁解をこころみたりしたが、効果はほとんどなかつた。

私は氣を鎮めようとして、息を吸ったり吐いたり、何度かくりかえした。

氣持が悪くなったらしい、と誤解されたのかもしれない。隣りに坐っていたラテン系の男が、英語で、

「スチュワードズを呼んであげましょうか」

と親切にいつてくれた。

結構です、と答えながら、私は顔をそむけた。むろん、私はその見知らぬ、ヒゲの濃い外人に対し

て恥じたわけではない。少年のように、他愛もなく興奮している私自身に対して羞恥を感じたのだ。

彼女が日本を去ったのは、もう三年余も前のことだった。一言の挨拶もなしに日本を出た彼女は、私のことなど、とうに忘れているかもしれないのだ。私にしながらが、彼女のことを想い出す日は少なくなっていた。歲月という特効薬の偉力で、私が負ったはずの深傷も自然と治っていたようだった。それがぶりかえしたのは、私がこの地への特派員となるように内示をうけてからだだった。

着任してから、その夜、つまり九月二十六日までの約一週間の間、私は支局開設にともなう、大小さまざま、そしてありとあらゆる種類の雑用に追いまくられた。

支局用の事務所を借り、助手兼小使の用をたしてもらう現地人をさがし、情報省へ出頭してプレスカードをもらい、国際記者クラブにメンバー登録を行ない、それにともなって金を払ったり、挨拶をしたり、書類を出したり、市内を駆けずりまわった。

じっさい、事務所一つを借りるのも、容易なことではなかった。二十年前の戦争直後は人口五十万人だったジャカルタの街は、いまでは三百万人にふくれあがっていた。住宅難は東京やニューヨークですでに経験済みだからと、ここへ着く前までは比較的のんきに考えていたのだが、その深刻さは戦

後の東京の比ではなかった。

大統領官邸やムルデカ広場のある市の中心部は、近代的な建築とオレンジ色の屋根に白壁の壁といったヨーロッパ風の建物とが、壮大な大王ヤシやタマリンドなどの熱帯植物に彩られて併立しているが、一步裏町へ入れば、電気も水道もない貧しい家がまるでごった煮のようにひしめきあっていた。

その上、私にとって、もう一つの大敵は、馴れぬ水と気候であった。一週間後には、私の頬の肉は削げ落ち、七日しかたたないのに七年は老けたような気がした。

九月二十六日の午後、果てしなく続いた雑用に疲れ切って、私が支局のソファで横になっていると、電話がかかってきた。

助手のカルティニは、安楽椅子に悠然と腰をおろしたままだった。電話のベルの音などは、ハエの羽ばたきほどにも感じないのかもしれないなかった。

緊張して受話器をとった私の耳に流れこんできたのは、日本語であった。

「香月さん、いますか」

どこかで聞いたことのある声だったが、それがだれのものかは、すぐには想い出せなかった。

「私が香月ですが」

「やあ」

声がにわかに明るくなった。そして、その特徴のあるフッフツという笑い方で、フリーのカメラマンをしている鳩谷実が電話をかけてきたことを悟った。

「なんだ、鳩谷君じゃないか。きみはいまここへきていたのか。ちっとも知らなかったぜ」

と続けざまに私はいった。言葉が、考えることなく、独りでにボンボン出てくる快さに、私の声まで弾んでいたようだった。

落ち着いて考えてみれば、鳩谷に再会したからといって、それほど喜ぶことではなかったのだ。かれに初めて会ったのは、私がニューヨークにいたところで、鳩谷は私のところへ写真の売り込みにしばしば現われた。

日本内地では、記者とカメラマンは、ほとんど一体となって仕事をする。記事には写真はつきものとなっているが、海外では事情がかわってくる。特派員は原稿を送るだけで、写真は、特約の外国通信社のもので間に合わせていた。

鳩谷は、私ばかりではなく、他社の特派員のもとへも売り込みに歩いてしたが、じっさいには、これを必要とするようなことはほとんどなかった。鳩谷はいつも尾羽打ち枯らしており、気の毒に思った私は、何度か食事をおごったこともあった。ピュリッツ賞をもらえるような写真を撮ってみせると、鳩谷は豪語していたが、それが実現不可能なことは、おそらく、かれ自身が一番よく知っていたのではあるまいか。

鳩谷は、約半年ほど、われわれ在ニューヨークの特派員の間をうろつきまわっていたが、とつぜん、ぱったりと姿を見せなくなった。

一度、A社の記者が、ダウンタウンのクラブで遊んでいるのを見かけ、私たちに報告したことがある。金に困っていたはずの鳩谷が、いつの間に、そんなところで遊べるようになったのか、とだれもが不思議がったが、もちろん、その理由を知っているものは一人もいなかった。

その後、ニューヨークでは、かれの消息を耳にすることはなかった。だが、私が本社に帰任したこ

ろから、かれの名前は、月刊誌のグラビアなどで見るようになった。

鳩谷の写真に共通していることは、構図や芸術味には欠けていたが、ふつうのカメラマンではなかなか撮れないような、いわば決定的瞬間とでもいうべきものを、しばしばとらえていることであった。たとえば、秘密の鉄火場のスナップとか、売春宿の内部の写真とか、多少ピンボケのものがあっても、かつてカメラがとらえたことのないような現実をうつしているのである。言葉をかえてい

ば、鳩谷は隠し撮りの技術では、群をぬくテクニクをもっているようだった。

私は鳩谷に対して、とくに興味をもっていたわけではなかったが、それでも、ある種の懐しさを感じないわけにはいかなかった。

「ニューヨーク以来、久しぶりだね。きみの写真は雑誌などでときどきお目にかかっているよ。近ごろはなかなか活躍しているじゃないか」

「いやア、あのころは、いろいろとお世話になりました」

「ぼくがきていることが、よくわかったな」

「つい、さっきまで知らなかったんですよ。じつは、仕事で地方へ行っていたんですが、きょうもどつてきましてね、国際記者クラブに顔を出したら、あなたの入会届が出ているので、さっそくお電話したわけです。一度、お会いしたいですねえ」

「きみは、いつから、こっちへきていたんだ？」

「そうですね、もう三カ月くらいになりますか。雑誌にたのまれて、東南アジアをシリーズもので撮っているんです」

その言葉を聞いて、私はかれと会う気になった。たとえ三カ月でも、私より先にきているならば、

この地の事情にくわしいはずである。かれの話を聞くことは、私の仕事の上にもプラスとなるだろう。

「きみは、いま、忙しいのか。記者クラブにいるなら、これから、そっちへ行く用事があるから食事でもしようか」

「記者クラブにいることはいるんですが」

と鳩谷は口ごもった。そして、数秒考えてから、

「じつは、夕方までに仕上げておく写真があるんです」

「じゃ、夕方にしようか」

「それでもかまいませんが、香月さんは、例のパーティーには出席しないんですか」

「例のパーティー？」

「ぼくは、あれに間に合わすために、きょう帰ってきたんですが、香月さんも、出席するんでしょう？」

「例のパーティー、といわれても、こっちにはなんのことかわからない。出席するもしないも、そのパーティーのことは知らないんだ」

「黄伯元という華僑がいましてね、有力な貿易商ですが、今夜、この男が外交官や外国特派員、それに、政府関係の高官も招待しているんです。だから、その席でお会いできればと思ったんですがねえ」

その話は初耳だった。

鳩谷のいうような顔ぶれが集まるならば、今後の取材の都合上からも出席したいパーティーだった

が、しかし、招待されぬものが出席するわけにもいかなかった。

私ができることをいうと、かれはちよつと思案してからいった。

「じゃ、こうしましょう。香月さんのところへ招待状が届いていないのは、たぶん、新任特派員なので、黄伯元がそれを知らないからです。知っていれば、招待したはずです」

「そういつても、こっちから、招待してくれということもできないさ」

「だから、ぼくが黄伯元に連絡しますよ。中国人というのは、人を招くのが好きですからね、喜んで招待するはずですよ」

「そんな、無理をしなくてもいいよ」

「香月さんが気にするほど、無理するわけじゃないんです。黄伯元はよく知っていますから、心配する必要はありません。場所は、ホテル・インドネシアです。そこにはかれ専用の部屋もあるので、たぶん、パーティー会場を使うでしょう。時間は七時からですから、その席でお会いしましょう」

私が制止するひまもなく、鳩谷は電話を切った。

インドネシアへきて三カ月にしかないという鳩谷が、どうして、そのような有力な華僑と親しくなれたのか、私には不思議であった。もともと、鳩谷は、他人に対して妙になれなれしいところがある。ニューヨーク時代、写真の売り込みのために支局へ現われたときも、まるで自分の事務所へ入ってくるのと同じように振舞った。

黄伯元に対しても、おそらく、そうなのであろう、と私は思った。そして、黄伯元の方では、鳩谷の申出を聞いて、眉をひそめるかもしれない。鳩谷は、いい気になっているが、黄伯元は呆れるにち